

# 「小・中学校連携と地域が一体となった取組による学力向上」

## －（「わかる授業」の構築をめざして）－

沖縄県教育委員会

### はじめに

本県は、全国学力・学習状況調査「教科に関する調査」の結果から、小・中学校ともに、平均正答率が全国平均を下回っており「わかる授業」の構築と基礎学力の定着が喫緊の課題として指摘されている。

この度、文部科学省委託事業「学力調査活用アクションプラン推進事業」の趣旨に基づき、個々の学校のみでは解決が困難な課題等の改善を図るため、推進市村教育委員会、小・中学校及び関係教育事務所が連携して学校教育の課題を改善することを目的として研究を推進した。

## I. 都道府県・指定都市教育委員会における取組

### 1. 事業内容について

#### (1) 事業概要

本県は、全国学力・学習状況調査の結果から、小・中学校ともに国語、算数、数学の各教科において、平均正答率が全国平均を下回った。

基礎的・基本的な知識・技能や課題を解決する力や思考力・判断力・表現力等の学力が十分身に付いているとは言えない状況であり、小・中学校ともに落ち込みの見られる単元・領域もわかった。

県としては、全国学力・学習状況調査の結果から見られる課題への対応として、「教科に関する調査」において、小学校、中学校ともに習得と活用の双方で県平均を下回った2市と、離島へき地において、課題の見られた1村を推進校に指定した。これらの地域の課題を改善することが、本県の抱える課題を改善するために有効な手立ての手法が構築できると考える。

授業の工夫改善と教師の指導力の向上に重点をおいた取組を推進する。

#### (2) 実施体制

①県教育委員会に「アクションプラン推進協議会」（年開催2回）を設置し、学力向上の

ためのアクションプランを策定し、各市町村教育委員会及び推進校に対して、本プランの円滑な推進のために必要な指導・助言を行う。また、本プランに基づく実践研究の成果と課題等の検証を行う。

- ②学力向上対策プロジェクトチームを設置し、訪問支援(3回)を行う。アクションプランに基づいて各学校が作成し実践する「授業改善プラン」の着実な実施及び課題への具体的な改善方策の実施状況について助言する。
- ③推進校に対して、授業改善プランの様式の掲示、諸調査の分析ソフトの提供、教科コーディネーターの活用、研修会等の開催、計画訪問の実施、先進校の情報提供などの取組をとおして、授業の工夫改善や教師の指導力の向上など「わかる授業」の構築への支援を行う。
- ④琉球大学教育学部との連携協力として、推進校学校訪問により授業の工夫改善や教師の指導力の向上など、授業改善の支援を行う。

#### (3) 研究成果

- ①諸研修会や学校訪問等を通して、教師の授業作りへの意識の高揚が図られた。
- ②琉球大学教育学部との共同研究による授業研究では、多様な視点からのアドバイスがあり、授業改善の意識が高まった。
- ③小学校との連携を図ることにより、学年のたすきを意識した、個に応じた指導が推進された。
- ④授業内容と連動した家庭学習課題を与え、家庭と連携した学習環境づくりが推進された。

## 2. 普及啓発と今後の取組について

### (1) 成果の普及啓発に関する取組

県として、「学力調査活用アクションプラン推進事業実践報告書」を作成し、県内全小・中校へ配布した。各学校は、推進校で取り組んできた実践研究の成果を共通認識し、今後

の授業改善に向けた取組を推進していく。

## (2) 来年度以降の取組

①アクションプランに基づく実践研究をとおして、以下の視点に立った学力が向上する学校モデルを構築する。

(ア)教師の指導力及び家庭・地域の教育力を最大限に発揮させる学校経営のあり方

(イ)小・中学校の校種間連携の在り方

②アクションプラン推進校の取組状況を把握する。

(ア)学校訪問等をとおした、取組状況の聞き取り調査

(イ)諸調査結果のデータに基づく、実践研究の検証。

## II. アクションプラン推進校における取組事例

「学びの姿勢の確立、基礎・基本の確実な定着を図り、幼児児童生徒一人一人に『生きる力』を育む」

-学校・家庭・地域社会の連携強化をとおして  
うるま市教育委員会

### 1. 事業内容について

#### (1) 事業概要

- 授業改善支援プランの作成
- 授業改善のための学校訪問や校内研修で指導助言
- 「うるま市具体的実践9項目」に視点をおいた授業改善の取組への支援
- 数学教諭授業研究会への支援
- 諸学力調査結果を活用した授業改善の取組への支援
- 琉球大学との連携

#### (2) 取組内容

- 全国学力・学習状況調査結果チャートの分析・考察・対応策を全学校分作成し提供した。
- 諸学力調査結果の詳細な分析・考察を行い、その課題に対する改善策等を示しそれぞれの学校の実態にあった取組ができるように支援した。
- 市学校訪問での指導助言内容を文書にして提供することで、よりの確な改善策を構築できるようにした。
- 「うるま市具体的実践9項目」を教師一

人一人が理解し、実践できるよう支援した。

- 数学教諭授業研究会による「教えて考えさせる授業」実践研究に係る取組を支援する。
- 幼稚園学力向上対策保育研究会の開催で、「うるま市具体的実践9項目」に係る取組の成果等を確認し、保育実践の充実化を図った。
- 小・中学校学力向上対策授業研究会の開催で、「うるま市具体的実践9項目」に係る取組の成果等を確認し、授業改善の充実化を図った。
- 家庭・地域学力向上対策実践報告会の開催で、学校・家庭・地域・関係団体との連携協力の在り方の確認を行った。

#### (3) 研究成果

- 諸研究会や学校訪問等を通して、教師の「うるま市具体的実践9項目」に対する意識が高まった。
- 県学力到達調査において、小学校は「算数B」以外の3教科で県平均正答率を上回った。中学校は、県平均正答率を上回った教科はないが、市の前年度平均正答率と比較すると全体的に向上した。

### 2. 普及啓発と今後の取組について

#### (1) 成果の普及啓発に関する取組

- 校長会や教頭会、諸研修会において、本研究の成果等を報告する。
- 学校訪問等の指導助言の中で、課題に対する成果のあった取組として紹介する。

#### (2) 来年度以降の取組

- 「うるま市具体的実践9項目」の確実な定着と充実・発展
- うるま市共通実践項目「あいさつ・返事・後始末」の推進
- 数学教諭授業研究会への支援強化

#### 【うるま市具体的実践9項目】

- 1 ねらいを明示した授業の実施
- 2 教材・教具・説明の工夫
- 3 板書の工夫
- 4 形成的評価と補習指導の実施
- 5 自己評価の実施
- 6 言語環境の整備と言語活動の充実
- 7 家庭学習と授業の連動
- 8 習得したことを活用する場の設定
- 9 学習習慣の確立

### 取組事例①

#### 「小・中学校連携と地域が一体となった取組による学力の向上」

うるま市立宮森小学校

#### (1) 学校の状況について

学校経営目標は「子ども達の生きる力(確かな学力・豊かな心・健やかな心)を育む」、学校教育目標は「心豊かで、たくましく、自ら学ぶ子の育成」である。全国学力・学習状況調査の結果は全国平均を下回り、特に算数の数量関係に落ち込みが見られた。最重要課題である確かな学力の向上をめざして、学習を支える力の育成のために、聞く態度日本一・あいさつ日本一・おそうじ日本一を児童のめあてとして取り組んでいる。

#### (2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

##### ① 琉球大学との共同研究による授業改善

指導案検討や授業研究会に琉球大学の先生方を招聘し、共同で授業作りをした。

授業研究会 4年算数「角」

授業者 上原 直幸

指導助言者 湯澤 秀文

(琉球大学教育学部講師)

授業研究会 6年国語

「言葉って、おもしろいな」

授業者 宮里 英里

指導助言者 村上 呂里

(琉球大学教育学部教授)



##### ② うるま市具体的実践9項目の徹底による授業改善

- ・ ねらいを明示した授業の実施
- ・ 教材・教具・説明の工夫
- ・ 板書の工夫
- ・ 形成的評価と補習指導の実施
- ・ 自己評価の実施
- ・ 言語環境の整備と言語活動の充実
- ・ 家庭学習と授業との連動
- ・ 習得したことを活用する場の設定
- ・ 学習習慣の確立

##### ③ 校内研修を通して「わかる授業」づくりの研究と課題

校内研修テーマ「活用能力を身につける指導の工夫」ー算数科の「量と測定」領域を通してー(授業の中で概念や法則などを説明する活動や情報を分析・評価・論述する活動等の言語活動の充実を通して「分かる授業」づくりの研究と実践を行う。

##### ④ 保護者と連携した家庭学習の質と量の向上

「分かる授業」と連動させた家庭学習や宿題の出し方や内容を検討し、保護者と連携して、家庭学習の質と量の向上に努めた。

学習環境強化週間の実施(保護者に家庭学習をチェックしてもらいサインをもらう)

##### ⑤ 補充発展の時間と補習の時間の計画的実施

補充・発展の時間と補習の時間を学年ごとに週時程に位置づけて実施した。

ねらい

- ・ 当該学年までの基礎的基本的な知識・技能の習得を図る。
- ・ 既習事項の習得によって当該学年の学習内容のつまずきを改善する。
- ・ 計画的に活用問題に挑戦することで、思考力・判断力・表現力の育成を図る。
- ・ 成就感を味わうことによって学習意欲を高める。
- ・ 児童の現学年までの学習内容の定着をめざす。
- ・ 学年内の単元は繰り返しながら定着を高める。
- ・ 補充・発展の時間は全学年が設定し、各種学力調査の結果等をフィードバックできるシステムにする。
- ・ 全職員で応援体制を組んで、必要に応じてボランティアを依頼する。
- ・ 教材は全学年のマスターシートや活用問題が使えるように校内学対委員会の基礎基本部会で用意する。その他は学習内容に応じて学年で準備して取り組む。



##### ⑥ 学習支援ボランティアの活用

月～金の各時間に学習支援ボランティア「かかゆまの会」を配置し、特別な支援が必要な児童の個別指導を充実させた。

### (3) 成果について

琉球大学との共同研究による授業研究では多様な視点からのアドバイスがあり、深まりのある授業研究会が持て、授業改善への意欲が高まった。

補充発展の時間の取組や非常勤講師と学習支援ボランティアの活用により、基礎的・基本的な事項の定着が高まり、市実力テスト等でどの学年も向上が見られた。

### (4) 来年度以降の課題について

家庭学習や基本的な生活習慣の指導等についての中学校とのなご一層の連携。

活用するための力(思考力・判断力・表現力)を育成する授業の工夫。

県の平均値より低い。

イ 下位層にかなりの生徒が集まっており、上位層が少ない。

ウ どの教科にも共通して「無回答」が多い。

エ 語彙力が不足し、文章問題への苦手意識が高い。

オ 「書く」ことに関して、自分の意見を表現する力が弱い。

カ グラフや表、地図などを読み取る力が弱い。

キ 数学Bでの無回答率がかなり高く、問題を解く前に諦めている傾向がある。

### 取組事例②

#### 「小・中学校連携と地域が一体となった取組による学力の向上」

うるま市立石川中学校

#### (1) 学校の状況について

沖縄本島中部の北に位置し、平成17年の市町村合併により、うるま市立石川中学校となった。

学級数は1学年が5クラス、2学年、3学年がそれぞれ4クラスで全校生徒478人の中規模程度の学校である。運動系、文化系をあわせて14の部活動があり、それぞれが活発に放課後の活動に汗を流している。生徒はやや積極性に欠ける面はあるが、明るく素直な生徒が多く、学校も年々落ち着きを見せ始めている。

近年都市化も進み始めているが、本校区では、いい意味での「田舎」の雰囲気が残りに、保護者の学校への関心も高く、PTAやおやじの会を中心に、学校への協力体制も良好である。



#### (2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

全国学力・学習状況調査の結果から見えてくる本校の課題として以下のことが挙げられる。

##### ①学習状況の視点から

ア 国語、数学A・B問題共に全国及び

#### ②生徒質問紙の視点から

ア 朝食を毎日食べる生徒が全国及び県の平均より低い。

イ 学習用具の貸し借りが多く、授業に向かう姿勢が弱い。

ウ 「ゲームをする時間」が1日4時間以上の生徒が全国及び県の平均より高い

エ 目標を持たずに学校生活を送っている生徒の割合が全国及び県と比べて高い。

以上のような課題を踏まえ、本校では校内研修のテーマである「生徒の学ぶ意欲を喚起させ生徒一人一人に『生きる力』を育む」分かる授業づくりの研究と実践を行ってきた。具体的な取組としては以下のことが挙げられる。

- ・小学校と連携し、学年のたすきを意識した補習指導等を全職員体制で行う。
- ・うるま市実践9項目の徹底(ねらいを明示した授業の実践、板書の工夫、言語活動の充実、家庭学習との連動等)
- ・地域人材や学習支援ボランティアの協力を得て特別な支援が必要な生徒の個別指導を充実させる。
- ・琉球大学教育学部と連携し、国語と数学で研究授業を行い、教師の授業力の向上を図る。



### (3) 成果について

成果については以下のことを挙げることができる。

- ①小学校との連携を図ることにより、学年のたすきを意識した補習指導が行えた。
- ②うるま市実践9項目を意識した日常的な指導の継続により、「分かる授業づくり」への職員の意識が高まった。
- ③地域人材や学習支援ボランティアの協力を得て特別な支援が必要な生徒への個別指導が充実した。
- ④琉球大学教育学部による研究授業を通して教科指導への理解が深まり、教師の授業力が向上した。

### (4) 22年度以降の課題について

- ①早寝、早起きなど、基本的な生活習慣を確立させる。
- ②学習指導や道徳指導などのさらなる工夫改善を行う。
- ③家庭学習の質の改善（授業との連動）を図る。

「幼児児童生徒一人一人に確かな学力などの生きる力をはぐくむ」

-地域ぐるみの活動を通して-

粟国村教育委員会

## 1. 事業内容について

### (1) 事業概要

本村は沖縄県那覇市の北西約60kmに位置する一島一村の離島で、島内1校の併置校を有する。

全国学力・学習状況調査の結果を見ると、昨年は小学校は全国平均を上回っていたものの、中学校は下回った。残念ながら、本年度も全国平均に及ばなかったため、少人数学級の利点を生かした授業の進め方や指導方法についての実践、小・中学校の連携による学習のつなぎを確実にすることなど、保護者・地域が一体となった取組を推進した。

また、授業改善支援プランに基づき、支援組織の体制を整え推進校を支援するため、計画訪問を実施するなど具体的な指導を行った。

### (2) 実施体制

- アクションプラン連絡会の開催(月1回)
  - ・粟国小中学校一校長(幼稚園長)、教頭、小学校教務主任、中学校教務主任、
  - ・教育委員会一課長補佐(学対担当)
- 琉球大学教育学部との連携協力

- ・小・中合同研授業、授業研究会

### ○那覇市立松川小学校

- ・先進校のモデル授業並びに授業研究会への教師の派遣

### ○沖縄県教育庁生涯学習振興課との連携

- ・教育講演会に係る講師の選定相談

### ○沖縄県教育庁島尻教育事務所との連携

- ・授業改善プロジェクト研修会への派遣、指導主事の招聘

### ○村学力向上対策委員会

- ・基本的な生活習慣の形成や家庭学習の取組に関する事項について確認や協力

### ○地域ユイマール塾

- ・小、中学生教室講師との連携

### (3) 研究成果

- 沖縄県学力到達度調査では、小学校では県平均正答率を下回った。中学校は一部の教科で県平均正答率を上回った。

- 学校に対する地域支援が広がりつつある(朝の読み聞かせや学校図書館土曜日開館等)。取組の充実が継続できるよう、PTAや村学力向上対策委員会との連携協力が構築された。

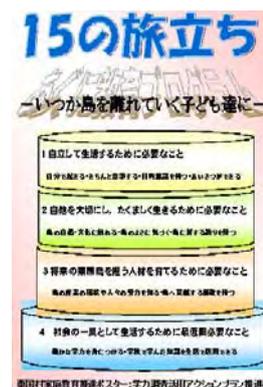
- アンケートの結果、家庭学習の実施率や国語、算数・数学の授業内容の把握の割合が、一回目調査と比較して高くなった。さらに家庭学習の定着指導と、授業改善の視点を明確にした具体的な手だてを確認し、共通実践すること等の意識の高揚がみられるようになった。

- 小中連携の取組体制が整いつつあることや、教師の各種研修会への派遣や指導主事招聘による授業研究会が充実した。

## 2. 普及啓発と今後の取組について

### (1) 成果の普及啓発に関する取組

- 基本的な生活習慣の形成や目的意識、自立していける子どもを育成する「粟国教育プログラム」用のリーフレットを保護者へ配布した。



- シンデレラタイムの励行と子どもの在宅確認のための「大人が変われば子どもも変わる運動」のリーフレットの配布



- 学力向上月間を年間2回設け保護者への周知を図った。
- 成果発表会を開催した。

## (2) 来年度以降の取組

- 授業改善支援プランを作成し、指導助言を行う。
- 毎月の教学(教育委員会と学校)連絡会で支援方法を確認する。
- 教員の各種研修会への派遣補助を行う。
- 各字別地域教育懇談会を実施する。
- 地域学力向上対策委員会(特に、地域・家庭教育部会)との連携協力を図る。
- 村学力向上実践発表会を開催する。
- 家庭教育講演会を開催する。
- 読書に関する講演会やイベント等を開催する。
- PTAの学校図書館土曜日開館を支援。
- 地域ユイマール塾との連携を図る。
- 全国学力・学習状況調査を希望利用する。

### 取組事項③

「たくましく生きる力をつけた幼児児童生徒の育成」

栗国村立栗国小学校

#### (1) 学校の状況について

全校児童生徒75名の小規模校で、「勤勉進取」の校訓のもと、毎朝のあいさつ運動や清掃活動、学力向上のための「マハナっ子月間」(11月・2月)を全校児童生徒と職員が一緒になって取り組んでいる。また、前年度から幼小中学校一貫教育のよさを生かして、15歳で島から旅立つ子ども達にたくましく生きる力を育む「栗国教育プログラム」の推進に取り組んでいる。

#### (2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

##### 【結果からの考察】

全国学力・学習状況調査は、20年度よりも県平均を下回っている。少人数のため、年度によって偏りがあるが、全般に学力は低い傾向にある。国語・算数ともに県平均を下回っている。課題は、以下である。

- ①学習意欲が乏しい
- ②記述式問題に難がある
- ③読解力が全般に弱い
- ④数量の関係を式に表す
- ⑤数学的な表現・技能
- ⑥表や文章からの情報の読み取り

##### 【具体的取組】

- ①基礎・基本の定着
  - ・朝の読書(月：読み聞かせ 金：読書タイム)
  - ・マハナっ子タイムの実施(火・木の朝8：20～35算数・国語)
  - ・マハナっ子タイム補習の実施(不合格者 火・木の放課後)
  - ・学力向上強化月間(11月・2月)
- ②学習を支える力の育成
  - ・学習の準備・始めと終わりのあいさつなど授業のきまりの確認。
  - ・意見を言うとき・賛成意見・反対意見など基本の話形指導。
  - ・家庭学習を授業と連動した課題の形で実施。
  - ・目標冊数の設定：10冊(質から量へ)
- ③1分間スピーチ等の指導(学級朝の会・帰りの会・全体給食後)
  - ねらいは、意見をまとめ、発表力を養う。
  - ・低学年：担任が題を与え、覚えて発表。
  - ・中学年：みんなで題を決め、みんなの顔を見て発表。
  - ・高学年：自分で題を決め、みんなの顔を見て発表。

##### 【授業改善の取組】

「確かな学力」をはぐくむ

「わかる授業」の創意工夫

～学びを「つなぎ・広げる」ために～

- ①本時の「めあて」を明確に提示する。
- ②考え・練り合い・深める時間を確保し、「かかわり合い」を大切にする。
- ③ノートをしっかりとりせ、それを活用させる。(宿題とがんばりノートの関連)
- ④まとめを大切にする。(授業感想に生かす)この4つを1時間の授業の中に取り入れ担任一人一人が真剣に授業実践を行った。

〔この4つを1時間の授業の中に取り入れ  
担任一人一人が真剣に授業実践を行った。〕



「活動ほう告を書こう」  
～書く・考える・学び合う～



「ミニサッカー」  
～めあてを意識した学習の取組～



「九九をつくろう」  
～乗法九九の具体的場面での活用～

### (3) 成果について

#### 【授業実践を通して】

- ①授業の始まりから終わりまで、小学校職員の共通理解のもと話型指導・授業の改善など積極的に取り組んだ結果、授業の流れが児童・教師共に見通せるようになった。
- ②授業研究会では授業改善方法について熱心に討議し、共有することで教師一人一人の指導技術が高まった。

#### (4) 来年度以降の課題について

- ①教材研究の中で「習得」・「活用」・「探求」を授業の中でどう捉えるのか、明確に深めることができなかつたので、1年を通して、月に1～2回程度の授業改善の研究会をする。
- ②授業と連動した宿題を出すことによって、次の授業につなげる授業の構築を目指したが、定着するには時間がかかりそうである。継続的な取り組みが必要である。
- ③児童一人一人への細かな指導が大事である。特別支援の児童や通級の児童に対する国語・算数の取組を児童一人一人により効果的にできる指導を全員共通の理解のもとで行う必要がある。

#### 取組事例④

「たくましく生きる力を身につけた幼児児童生徒の育成」

栗国村立栗国中学校

#### (1) 学校の状況について

全校児童生徒75名の小規模校で、「勤勉進取」の校訓のもと、毎朝のあいさつ運動や清掃活動、学力向上のための「マハナっ子月間」（1月・2月）を全校児童生徒と職員が一緒になって取り組んでいる。また、前年度から幼小中学校一貫教育のよさを生かして、15歳で島から旅立つ子ども達にたくましく生きる力を育む「栗国教育プログラム」の推進に取り組んでいる。

### (2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

#### 【栗国中学校の課題】

「全国学力・学習状況調査」の結果から、本校の課題を確認し、共通理解をした。国語では、中学校3年生に関しては、

- ①学習意欲が低い、
- ②記述問題に答える事ができない、
- ③文章を読んで、内容をまとめる事ができない、という課題がある。

数学は、

- ①具体的な事象や表から、数量の関係を式で表す、
- ②数学的な表現を用いて説明する、
- ③表や文章から必要な情報をよみとる事が弱い、という課題がある。

#### 【実践活動】

- ①授業改善（1人1回以上の研究授業）  
国語の授業では、琉球大学から村上呂理教授を招いての研究授業、授業研究会を全体で行った。
- ②授業と連動した宿題  
月曜日は国語、火曜日は数学、水曜日は社会科、木曜日は理科、金曜日は英語を実施。
- ③毎週1回の豆テスト  
毎週木曜日の朝の読書（8時15分～25分）を豆テストに置き換え、5教科をローテーションで実施する（国語→数学→社会→理科→英語）。各教科のテストを20点満点に統一し、結果は3学年一緒に一覧表にして掲示する。



④「マハナっ子月間（学力向上強化月間）」

1月1日と2月に実施。月曜日は名作小説の暗記トレーニング、火～木曜日は国語、数学、英語の基本問題、金曜日は豆テストを行う。各クラスに3～4人の教師を割り振り、個別指導ができるようにする。



⑤「確かな学力」の定着を図る取組

曜日別に教科担任が宿題を提示し、翌日生徒は宿題を教科担任に提出する。1冊終了後、校長から新しいがんばりノートをもらう。ただし、書いてある内容から校長が3問出題し確認する。

⑥1分間スピーチ

給食時間の終わりに、全児童生徒の前で1分間スピーチを行う。原稿を事前に書き、覚えて発表する（年に3回）。



⑦「豊かな人間性」の育成を図る取組

ミニ講演会の実施。毎月1人～2人程度地域の人を講師に講演会を行う。



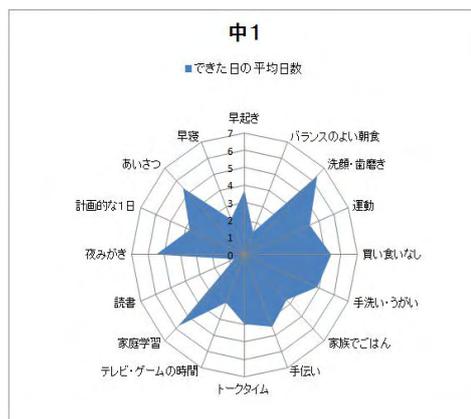
【小中連携した取組】

- ①研究授業（1人1回の研究授業）
- ②小中学校の授業等での約束事

【地域連携の取組】

- ①講演会
- ②生活点検表の実施
- ③アンケート集計・分析・考察及び保護者へ

配布



(3) 成果について

- ①週に1度豆テストを行うことにより、意欲的に勉強する生徒が増えた。（学習意欲の向上）
- ②マハナっ子月間（学力向上月間）の取組後、「自分のためになった」「粘り強く勉強したら分かるようになった」という感想を持った生徒が多くいた。
- ③教科担任が宿題を提示することにより、授業の進度にあった予習や復習ができ、授業の定着につながっている。（日々の授業と家庭学習の連動）
- ④夏期講習を行うことで、授業時間内では定着できなかった学習を補うことができた。（基礎・基本の定着）
- ⑤1分間スピーチを継続することで、自分の考えを相手に伝えようとする態度が身についている。（表現力）

(4) 来年度以降の課題について

- ①家庭学習帳（頑張りノート）の提出冊数が多くても、学習の定着にはつながっていない場合がある。対応策として、勉強の仕方やノートの使い方の指導を強化していく。

「幼児児童生徒一人一人に基礎・基本の定着を図り、確かな学力などの生きる力をはぐくむ」  
-学校・家庭・地域の連携強化をとおして-  
石垣市教育委員会

1. 事業内容について

(1) 事業概要

沖縄県教育委員会策定のアクションプランに基づき、本プランの円滑な推進のために、推進校（新川小学校、石垣中学校）に対して計画訪問や具体的な指導・助言を行う。

- ①新川小学校

全国学力・学習状況調査の結果から本校の課題解決をめざして、「授業改善プラン」等を作成した。それに基づいて、学級担任、指導法工夫改善担当（少人数加配教諭）、国語教科コーディネーター等が協力しあって実践を行った。

## ②石垣中学校

全国学力・学習状況調査の結果から「授業改善プラン」等を作成し、明らかになった課題改善のために、学年間の連携及び小・中学校連携、「わかる授業」の構築及び授業と関連した家庭学習の在り方、教師の授業力の向上の取り組みを「授業改善プラン」に位置づけ、PDCAサイクルを機能させて実践研究を推進した。

## （２）実施体制

沖縄県の委託を受けた本市教育委員会と本地区推進校が共同で実施。推進校が実践し、本市教育委員会が指導助言を行った。

各学校の全国学力・学習状況調査等の分析結果を分析して「授業改善支援プラン」を作成し、支援組織体制を確立した。推進校計画訪問を実施して具体的な指導助言を行った。

各学校も、校内に各部を置き、推進体制を整え実施した。

## （３）研究成果

①新川小学校においては、諸学力調査による数値的な成果は大きく上げることはできなかったが、教師の授業改善に対する意識や児童の学習意欲の向上には一定の成果を上げることができた。

### 【具体的な成果】

- ・全学年研究授業を行い、学力調査官や指導主事の助言や授業研究会の充実が指導力と授業改善への意識の向上につながった。
- ・教科コーディネーターと連携した授業づくり（４・５学年）
- ・指導法工夫改善加配教員と連携した授業づくり（３～６年）
- ・毎朝読書をすることによって読書習慣が定着されつつある。
- ・「辞書引き学習」の実施による言語に対する関心が高まりがみられた。
- ・家庭学習の習慣化が図られた。（児童の約９割）
- ・教育講演会の実施によって睡眠と朝食、運動の大切さを保護者に伝えることが

でき、家庭と連携した生活リズムの確立が図れた。

②石垣中学校においては、生徒の実態及び全国学力・学習状況調査の分析結果から見られる課題の改善に向けて授業改善プランを作成し、実践することができた。設定した達成目標の達成状況を検証した結果、総合的な評価として「３」であった。今後、さらなる取り組みを進め子どもたちの学力向上のため授業の工夫・改善を図っていききたい。

### 【具体的な成果】

- ・学力向上主要施策及び確かな学力支援プランを機軸に据えた研究の推進
- ・石垣市学力向上対策推進要項に基づく取り組み
- ・教師の授業力向上を「授業改善プラン」の中に位置づけ、PDCAサイクルを機能させた。
- ・教科コーディネーターと連携した授業づくり
- ・発問、板書、書く活動を等「わかる授業」の関わり合いを大切にされた実践
- ・T・Tの授業実践研究
- ・授業と連動した課題の在り方

## 2. 普及啓発と今後の取組について

### （１）成果の普及啓発に関する取り組み

成果報告を、石垣中学校校区内学力向上対策実践報告会で行った。さらに実践報告書を保護者や市内各学校に配布した。また、インターネット等も活用して情報の共有化を図る。

### （２）来年度以降の取り組み

推進校の課題克服等の取り組み強化における支援をはじめ、それぞれの成果を基に管内全小中学校の学力向上の推進に役立てる。

### 取組事例⑤

「児童一人一人に基礎・基本の定着を図り、  
確かな学力などの生きる力をはぐくむ」  
石垣市立新川小学校

#### （１）学校の状況について

本校は、全国学力・学習状況調査の結果から、国語・算数ともに平均正答率が全国平均を下回っており、基礎的・基本的な知識・技能や課題を解決する力、思考力・判断力・表現力等の学力が十分身につけていないことがわかった。それは、授業での理解度不足、家庭学習時間とそ

の内容の問題、就寝・起床時間のずれ、忘れ物等の生活習慣に起因している。個に応じたきめ細かな指導等の「わかる授業」づくりと授業と連動させた家庭学習の内容の充実、生活リズムの確立などが必要となる。



〈漢字ミニ先生〉 漢字に対する興味関心が湧くように工夫  
 〈伝え合う場の設定〉 自分の考えを書いたり発表したりする機会

(2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

① 授業改善をめざした校内研修 (国語)

〈研究主題〉

読解力を高める指導の工夫  
 ～国語科の読む活動・表現する活動を通して～

本校児童の課題である情報の読み取りとそれをもとに考えを書くことに視点をあてて授業改善に取り組んだ。年間6回の研究授業を通して

- (ア) テキストを解釈、熟考・評価しながら読む力を高める手だての工夫 (発問・ワークシート等)
- (イ) テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取り組み (要約文・感想文・意見文・批評文など) を行った。



授業の工夫改善



充実した研究授業・授業研究会 (ワークショップ)

② 国語教科コーディネーターの実践

- (ア) 標準学力検査及び全国学力・学習状況調査の分析と考察
  - 本校児童の実態把握と課題に対する方策→担任とともに授業改善
  - (イ) 授業づくりへの関わり
    - ティームティーチングによる授業実践
      - ・授業への介入・授業公開・授業観察
    - 校内研究への関わり
      - ・研究授業に向けての共同研究
      - ・実践事例の紹介・資料の作成
  - (ウ) 情報の提供
    - 教科コーディネーター便り「太陽の子」
    - 校内研修における指導助言

③ 算数少人数指導による授業改善

- (ア) 集団編成の方法と工夫
  - 单元ごとの診断的評価に基づいて学習集団の編成
  - (イ) 指導方法
    - 具体物を用い、操作活動を多く取り入れた。



- 单元テストの結果から理解不足の児童には補習等で指導を行った。

④ 家庭学習 (宿題) の習慣化の取り組み

- (ア) 「家庭学習の手引き」「家庭学習のやくそく」の配布と活用促進
- (イ) 家庭学習強化月間中の取り組み
  - 時期：5月・11月・2月
  - 家庭学習カレンダーで保護者のチェック
    - 各自のめあての評価
  - 「夢の木」→継続して頑張ったら夢の木に花が咲く。

⑤ 家庭と連携した生活リズムの確立

- (ア) 講演会：前橋 明 (早稲田大学教授) 「生活リズムと学力を結ぶ健康科学」  
 ～食べて・動いて・よく寝よう～

(3) 成果について

- ① 研究授業を通して国語の指導法についての研究を深めることができ、その後の授業にも生かされた。
- ② 授業研究会の充実が指導力の向上と授業改善への意欲の向上につながった。
- ③ 国語教科コーディネーターの指導・助言により授業力が向上した。
- ④ 算数少人数指導で児童が意欲的に学習するようになり個別の指導が行き届いた。

- ⑤家庭学習強化月間の取り組みの結果、約9割の児童が家庭学習をやってくるようになった。
- ⑥講演会等の実施により、睡眠と朝食、運動の大切さを保護者に周知し、家庭と連携した生活リズムの確立のための足がかりとなった。

#### (4) 来年度以降の課題について

- ①これまでの成果を生かした国語科授業改善の発展的充実
- ②授業と関連づけた宿題の与え方や家庭学習の内容の充実
- ③家庭や地域と連携した生活リズムの確立

#### 取組事例⑥

##### 「いきいきと学習活動に取り組む生徒の育成」 石垣市立石垣中学校

#### (1) 学校の状況について

本校の規模は単式学級18学級、特別支援学級1学級の計19学級で編制された適正規模の学校である。

生徒の学力は、全国学力・学習状況調査の結果、全国はもとより県平均を下回る状況であり、基礎・基本の定着を図る取組を過去3年間の校内研修で行ってきた。

#### (2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

全国学力・学習状況調査等の分析結果から明らかになった課題改善のために、学年間の連携及び小・中学校連携、「わかる授業」の構築及び授業と関連した家庭学習の在り方、教師の授業力の向上の取組を「授業改善プラン」に位置づけ、PDCAサイクルを機能させて実践研究を推進した。

教科コーディネーターと連携し、TTや少人数指導による個に応じた指導などの授業づくりを中心に、研究体制として「指導方法研究部」と「調査研究部」を設置し、以下の方針の下、研究を推進した。

- ①校内研修に位置づけ、全職員の共通理解のもと推進する。
- ②「指導方法研究部」と「調査研究部」を設置し、研究を推進する。
- ③授業改善プランを作成し、計画的に取り組む。
- ④実践前後にアンケートを実施し、研究の評価をする。

- ⑤授業と連動した課題の提示。
- ⑥教師力の向上を目的とした講演会を実施する。

#### 【国語科の実践】

##### ○調査からみえる課題

- ・読み取って抜き出したり、まとめたりする力が弱い。
- ・言語事項において、漢字に関する問題(同音異義語、同訓異字、慣用句)は正答率が低い。
- ・設問が発展的になったり、複雑になったりすると最初からあきらめてしまう生徒が多い。

以上の課題から「書く」力の育成に重点をおいた授業実践例を紹介する。

授業前のアンケート結果から、本校の生徒は意欲が無く「書かない」のではなく、書きたい気持ちはあっても、どう書いていいかわからない＝「書けない」生徒が半数いることがわかった。

そこで、次の授業仮説のもと実践を展開した。

- ・自らショートストーリーを作成し、作品の背景や内容を学習することで、俳句の味わいがより深まるであろう。
- ・お互いのストーリーを鑑賞することで、相手の作品と比較しながら今後の文章作成に生かすことができるであろう。
- ・「書く」ことが苦手な生徒に、文章の形成を提示して何度も書かせることで、抵抗なく書く活動に取り組めるようになるであろう。

#### 【数学科の実践】

調査からみえる課題解決のため指導の重点として次の3つとした。

- ①結論が成り立つ理由を説明するためには何が必要かなど、見通しをもって説明構想する活動の充実。
- ②ノートに書かせ、学びあう場を設定するなど書く活動の重視。
- ③実験や実測など実感を伴って図形の性質を理解する活動の重視。

また、数学科に配置されている教科コーディネーターは主に次のことに取り組んだ。

- ・「自分の考えがいえる」「お互いの考えを

見たり聞いたりする」など、生徒が参加する授業。

- ・「板書（単元名、めあて、まとめ）やノート」など、書く活動の充実。
- ・基礎的・基本的な知識技能を図るための家庭学習の習慣化。
- ・本務校、兼務校の授業改善及び情報の共有化、指導主事との連携。

### （３）成果について

- ①生徒のアンケートで、「国語の授業がわかる」が８０％以上を達成した。また、「国語が好き」が１回目に比べ４ポイント高くなった。
- ②保護者アンケート結果から「進んで宿題に取り組んでいる」が高くなった。
- ③「わかる授業」のため授業改善に取り組む教師が増えた。

### （４）来年度以降の課題について

- ①「わかる授業」をめざした更なる指導方法の工夫・改善
- ②授業と連動した課題の継続研究。
- ③小中連携の取組の工夫。
- ④家庭・地域との連携の更なる強化。